

2012年8月、火星探査機キュリオシティが火星に着陸した。キュリオシティとは「好奇心」という意味で、地球人の火星にたいする好奇心を背負った探査機だった。地球人はそのむかしから火星には独特な姿をした火星人がいる、と信じてきた。火星人が襲来する話もたくさんある。なぜかいつも地球人が勝利を収めるのだが。

探査の結果、火星人はいないらしいが、細菌やバクテリアといった生物は存在するようだ。

レイ・ブラッドベリの小説『火星年代記』は地球人の火星への侵略と火星人との対立、その後の地球人の撤退、さらに、火星に残った地球人のエピソードが語られているSF小説の枠を超えた作品だったが、これから先、火星人はいないとしても、地球人は火星に住むことになるだろうか。好奇心は満載だが、それを見ることなど叶わないだろう。

湯本香樹実<sup>かずみ</sup>という作家に『夏の庭』という小説がある。相米慎二監督が三國連太郎を老人役に映画化した。

祖母が死んだことをきっかけに「死」について好奇心を持った少年三人が、近くのボロ家屋で暮らしているひとり暮らしの老人がもう死ぬらしいという噂を聞き込み、その死を見るために老人の家を監視するという話だ。死という好奇心からはじまった少年と老人の関わりは、老人の戦争時の殺人体験にむかい、少年たちは学校では学べない「人の死」について（老人の死も含んで）体験をする、というひと夏の成長期だ。

ひととは思春期に培った経験を機に「おとな」になるのではなく、「おとな」とは文化的かつ社会的規範であり、かつ、この学帰りの小学生たちを集めて下手な手品を披露してヤンヤンヤの拍手喝采を受けて、ぼくらのちょっとしたヒーローになっていたが、親たちは「\*\*さんには近づかれん」と注意したものだ。」「近づかれん」ことに魅力があつて、ぼくらは親には内緒で彼の家まで押しかけた、という子ども時代の経験がある。

ステイヴン・キングの小説『スタンド・バイ・ミー』は死体を探しに行く少年たちの物語だ。映画もヒットした。死体探しという現実離れた行動の先には、もう子どもには戻れない、という自己との決別の思想がある。

思春期はこのように、好奇心とともに暮らしているといつていい。  
好奇心は、思春期の心を充たして、次のステップへの培養液になる、とおもうのだが、最近はこの、他者、見知らぬ者、危うい者、得体の知れない者、への好奇心が危険と隣り合わせになっている。たしかに、ぼくらがこどものころも「好奇心」は危うい体験との隣り合わせになっていたとおもうのだが、その「危うい体験」が命と引き替えになることはなかったようにおもう。（ぼくの周辺での事例だけだが）

先月末、神戸長田区で小学一年生の女の子がバラバラ死体で発見された。少女は猫が好きで、加害者の住むアパートにも猫を目当てに通っていた、とTVニュースでやっていた。小学一年生ぐらいなら好奇心は旺盛だろう。普段の自分の行動範囲から外れて、冒険したくなるだろう。少女はその日、遊ぶ約束をしていた友だちが風邪をひいて遊べなくなって、ひとりで冒

規範はみずからが獲得するものではなく、否応なく他から押しつけられるものであり、ひとは情熱と無分別と反抗だけでは世間を渡れないことを自覚し、「おとな」としての規範を受け入れることをみずからに承認する、とはかの岸田秀の「本能の壊れた人間」論である。

『夏の庭』という小説は、「好奇心」を経た体験が、少年たちの内面で成熟することによって、思春期の少年を「おとな」にさせることもあるのではないだろうか、とおもわせる小説だったが、岸田の言い分を通すと、「死を知る」ということもすでに社会的規範、制度の中に組み込まれていて、それは、みずからが求めたというような錯覚をすることも出来ないが、あらかじめ用意されたものである、ということだろう。

ぼくらは、ヒトとして生存しはじめた初期から「死を知る」（これは死を恐れる、死を畏れるにつながつているだろう）という行為は脈々と文化として、社会的規範として、制度として存続しているのかもしれない。それは『夏の庭』でいえば、老人の死を観察するという行為は、少年のうちのひとりの祖母が死んだことをきっかけにはじまるのだが、「死を知る」という行為は少年たちが望んだように見せかけてはいるが、すでに外部で用意されている、ということだろう。

こどもには「好奇心」がある。自分のこどものころをさかのぼってみてもそうだ。近所の、いつも挨拶をかわすおんちゃんではなく、どこか得体の知れない、世間のおとなたちには疎まれているが、どことなく謎を持っていそうなおんちゃんに好奇心を抱いたものだった。

ぼくのこどものころ、仕事もしていない中年おんちゃん、通険していたのかもしれない。家の周りの未知の場所を「冒険」していたのかもしれない。

これから先、この地区の少年少女は「未知の冒険」がしばらくは御法度になる。通学路には、善意のボランティアの好々爺が注意を促し、少年少女はおとなが決めた道順で思春期を終えることになるだろうか。

複数で「冒険」すれば安心だろう、というひともあるかもしれないが、単独で、たったひとりで「冒険」したいこどももいるのだ。

ときどき、「不審者を見かけたら警察に」と看板を見ることがある。ぼくは自分のことを不審者とはおもっていないが、他者が、見ず知らずの他者が見たら、充分「不審者」だろう。

ぼくはこどもは嫌いだからどうってことはないのだが、こども好きの「不審者っぽい人」がいて、彼が通りすがりのこどもの頭でも撫でようものなら、それはもう大変な騒ぎになるかもしれない。彼にしてみれば、ほんのコミュニケーションだったとしても。

いまの世間、ちょっと危うそうな者、どことなく不信感を漂わせている者、そんな日陰者が生きにくい世になってしまっている。「不審者」と「犯罪者」は誰にも区別がつかないという理由で。

長崎では女子高生の殺人事件があった。加害者の少女は「人体」への好奇心があったのだろう。ひとは「向陽性の好奇心」よりも「歪んだ好奇心」に魅力を感じるのかもしれない。

それは少女だけではなく、ぼく自身にもそういう傾向がある、

と自覚している。人体をバラバラにする、という意味ではなく、どこか、正常ではないもの、ひとが避けるようなもの、愛情にしても、妙に清廉潔白な率直性などあまり興味がなく、どこか歪んでいるような心と心の結びつき、そんなもののほうが好ましいとおもっている。それが性愛の深度を深くする、とおもったりしている。

ひとにはオキトシンという脳内ホルモンがあり、それが分泌されることで、ひととしての愛情、信頼などを育むらしいが、その愛情、信頼の中身がひとそれぞれ、ということだろうか。オキトシンに優性、劣性があるとしたら、もしかしたらそれのひとつの愛情の在り方を決定してしまっているのかもしれない。

加害者の少女のころのなかでなにかが渦巻いていたのか知りたいとおもったりするが、少女自身もみずからの欲望の糸をときほぐすことなどできなくて、他者への説明なんてどうみても不可能としかおもえない。みずからの欲望についてみずからのころのなかで自己終結し、それを自己評価することがあったとしても、そのことを言葉という曖昧模糊な媒体に乗せて、他者に説明することなど不可能だろうとおもわれる。

ひとの心は難儀なものである。他者に説明できるどころか、自分にすら説明できない。だから、自分自身を痛めたり、他者を痛めたりする。

説明しようとする、極端に寡黙になったり、極端に饒舌になったりして、物事の核心(そんなものがあるとしての話だが)を取りこぼしてしまうのがオチだろう。

ひとの心に「好奇心」を持ってみても、なかなかひとの心のなかには入っていけないものだ。長崎の少女はこれから先、ど

んな人生を送るのだろう。

歪んだ好奇心がある、なんていつているほくは、そんなことを言いながらも、それなりに犯罪者にならずに66歳になった。少女のように犯罪者にならなかった、というだけのこと、ひとに言えないことの10や20はある。犯罪者になるきっかけがなかった、というだけなのかもしれない。まあ、そんなことはほくだけでなく、この世間を生きている人のすべてがそうだろう。みんな平然と口をぬぐって生きている。わたしは清廉潔白です、というようすまじ顔をして生きている。それが世間というものだろう。だから、犯罪者にならなかった理由は、ただ幸運だった、それだけとおもう。長崎の少女は幸運から外れてしまった。

少女がいまどこにいるかは知らないが、充足しているだろうか。そのうち、時間がたつと、空虚感にうちひしがれることになるのだろうか。だれにもわからないことだし、少女にすら自分のころのなかは見通せないだろう。たぶん「これぐらいだろう」と納得していきうしかないだろう、これすらも。そして、ほくもきつと、「これぐらいだろう」という居心地の悪さのなかで生きていくしかない、きつと、生きていくしかない。

と、昨日、加害者の父親が自殺したというニュースが流れた。なんか、他人事ではないような気分だ。生きていくことも死んでしまうことも、どうしようもなく切ないものだ。